

近代日本における系図と「家」
ー 森岡清美の「家」研究の再読を通してー

米村千代（千葉大学）

yonemura@chiba-u.jp

比較家族史学会2024年春季大会シンポジウム資料

「系図と継承」第一部『系図が語る世界史』の現在

2024/6/22

報告の構成

- 1 『系図が語る世界史』からの示唆と本報告の目的
系統の卓越性と正統性の主張・虚構性
- 2 森岡清美による先祖観の整理
先祖観の位相
イデオロギー的先祖の解釈
双系的先祖観
- 3 近代日本における「家」と系図
- 4 まとめにかえて

1 『系図が語る世界史』からの示唆・本報告の目的

- 系図が作成される理由

危機意識、正統性の揺らぎ
自身の系統の卓越性の主張

- 「家」の擬制的性格

系図の虚構性
先祖の「発見」

- 虚構性の背後にある人々の積極的意図と社会的背景

→近代日本の「家」研究との接合

2 森岡清美における先祖観の整理

- 桜井徳太郎による祖先観の分類（桜井 1974）

直接経験的具象的祖先観

間接経験的観念的祖先観

イデオロギー的抽象的祖先観



- 森岡による分節化（森岡1984）

伝承的もしくは擬制的祖先観(近世以前の豪族名家の系図に現れる祖先観)*有賀の「出自の先祖」

抽象的なイデオロギー的祖先観（近代の家族国家観の基礎とされた祖先観）

両者の重層構造を認めつつ、両者の違いを重視

（国民道徳論のテキストが）「祖先祭祀を復興させ、思想的道徳的に「家」を強化しえたかどうか極め疑問」「家族的祖先敬慕」と「国民的祖先敬慕」の間の矛盾（森岡1984:129-130）

2 森岡清美における先祖観の整理(続き)

- 双系的先祖観

 - 都市化による移動の増大

 - 都市下層における新興宗教の拡大

 - 非家的、双系的先祖観の登場

- (「家」は変容ないし衰退) 先祖祭祀は幅広く存在

参考：竹田聴洲『祖先崇拜』における系図・系譜意識

(このように) 家は家族生活とは独立に世代を超えて存続して行くのであるが、その存続は世代を遂う直系相続によるのが原則である。しかし之は直ちに血統・血縁と同じではない。もとより血統の尊重は、我国においても古来極めて強かったから、事実上は直系血統相続の形をとることが多いが、血統の断絶はそのまま家の断絶を意味しない。夫婦養子の風習をみても明らかのように、血縁が断欠すれば非血縁者の養取によって家の相続は行われる。血縁は非血縁に優先はするが、決して家存続の絶対条件ではなく、家は血縁を超えてそれ自身存続し得るのである。これは家を荷う家族の中に非血縁者も含まれることを意味するものである。このように血縁の有無を超えて累世直系的に相続されるのが家とすれば、その本質は即ち系譜関係であるとしなければならない。系図として具象化されるか否かはともかく、原理的にいって家は系譜的直系相続の関係に外ならない。(竹田1957:16)

参考：柳田國男『先祖の話』における二つの先祖

先祖という言葉は、日本では人によってややちがった意味に用いられ、また理解せられている。だいたいこれを二つに分けて、一方はまず文字によってこの語を知ったものである。こういう人たちは、通例家の最初の人ただ一人が先祖だと思い、そうでなくとも大へん古い頃に、生きて働いていた人のことだと考えている。文字の面からいうと、少しでも無理はない解釈であり、また時々話に出て来るのも、そういう名の判っている人の事が多いのだから、自然に系図などの筆始めに掲げられてある人をさして、先祖は誰それだという者が多くなっているのである

しかし他の一方に、耳で小さい時からこの言葉を聴いて、古い人たちの心持を汲み取っている者は、後に文字を識りその用法を学ぶようになって、決してそういう風には先祖という言葉が解してはいない。いちばん大きなちがいは、こちらの人たちは先祖は祭るべきもの、そうして自分たちの家で祭るのでなければ、どこも他では祭る者のない人の霊、すなわち先祖は必ずおのおの家々に伴うものと思っていることで、それを明白に言い切った人こそ少ないが、その心持はいつでもこの語を使うときに現れているそれを私はもう大分久しく、気をつけて聴いていたのである。（柳田1946→1990:14）

参考：有賀喜左衛門における系譜の二重性

- 「日本において先祖を祀ることには家の守護神として祀る考え方が相当に強く含まれていたように思われるが、商家の別家が本家の先祖を、その一統として共同祭祀する意味にはかなり複雑なものがあるように私は思っている。」（有賀1959→1969:333）
- 「出自の系譜の意味は、（中略）二つの場合があった。一は現実の家の共同関係と結びつくものであり、二は現実の家の共同関係とは結びつかないが、これを強くまとめる作用を持つものであった」（有賀1959→1969:345）
- 始祖と初代をわける（鴻池の事例）
大屋の先祖と自家の先祖を二重に持つ（岩手県石神斎藤家）

3 近代日本における「家」と系図

- 社会変動期・転換期における「家」の強化
- 縦と横の連帯（「界」の形成）
若干の事例から
- 小さな「家」・新しい「家」の誕生と系図
系図の書式の普及
「ご先祖様になる」
- 系譜の操作性

4 まとめにかえて

- 近代日本における「家」と系図
 - 「家」の存続の象徴
 - 始祖の重要性・宗教性
 - 縦のラインと横のネットワーク
(父系のラインと横のネットワーク)
 - 階層性
- 系図のこれから
 - 「家」の衰退と系図
 - ファミリーヒストリーとしての系図
(現在からたどる家族の歴史)
 - 女性にとっての系図

文献

- 有賀喜左衛門 1959 「日本における先祖の観念－家の系譜と本末の系譜と－」岡田謙・喜多野精一編『家－その構造分析』創文社→1969『有賀喜左衛門著作集VII』未来社
- 森岡清美 1984『家の変貌と先祖の祭』日本基督教団出版局
〃 2001『華族社会の「家」戦略』吉川弘文館
- 歴史学研究会編 2002『系図が語る世界史』青木書店
- 桜井徳太郎 1974「柳田國男の祖先観 上」『季刊 柳田國男研究』7:79-96→1991『桜井徳太郎著作集第8巻』吉川弘文館
- 竹田聴洲 1957『祖先崇拜』平楽寺書店
〃 1976『日本人の「家」と宗教』評論社
- 柳田國男 1946『先祖の話』筑摩書房→1990『柳田國男全集13』ちくま文庫
- 米村千代 1999『「家」の存続戦略』勁草書房
2014『「家」を読む』弘文堂